へ 13
3841
10

門へ13
號3841
卷10

# 足利紫第十八編

とし書

壹

## 足利紫序

足利紫序

足利紫第十八編序

おもふに書作る者の用ゐる根骨奪胎といふことあり。こゝに故人の佳作を種とし。男と女と男と女。式ハ左と右とる。右を左と倣ふの類。その取捨の巧拙あり。全くこゝろ物とゝのせるあり。已が物ハ二ふにして。他人の趣向を佳作の妙案とする。また文のさえ鳥滸がましきとゝのさえ。作とゝのさえ。雅へて今様めかすのゝ元ゐ出灵得脱怪談邪悪切支丹。更ふ作者の才気に生ず。カの奮勇を焼くゝて彩ちくする俳諧者流。と女の癖を二ツふまるも。俗の流行ふゝさがゝといえん

安政三丙辰歳孟春

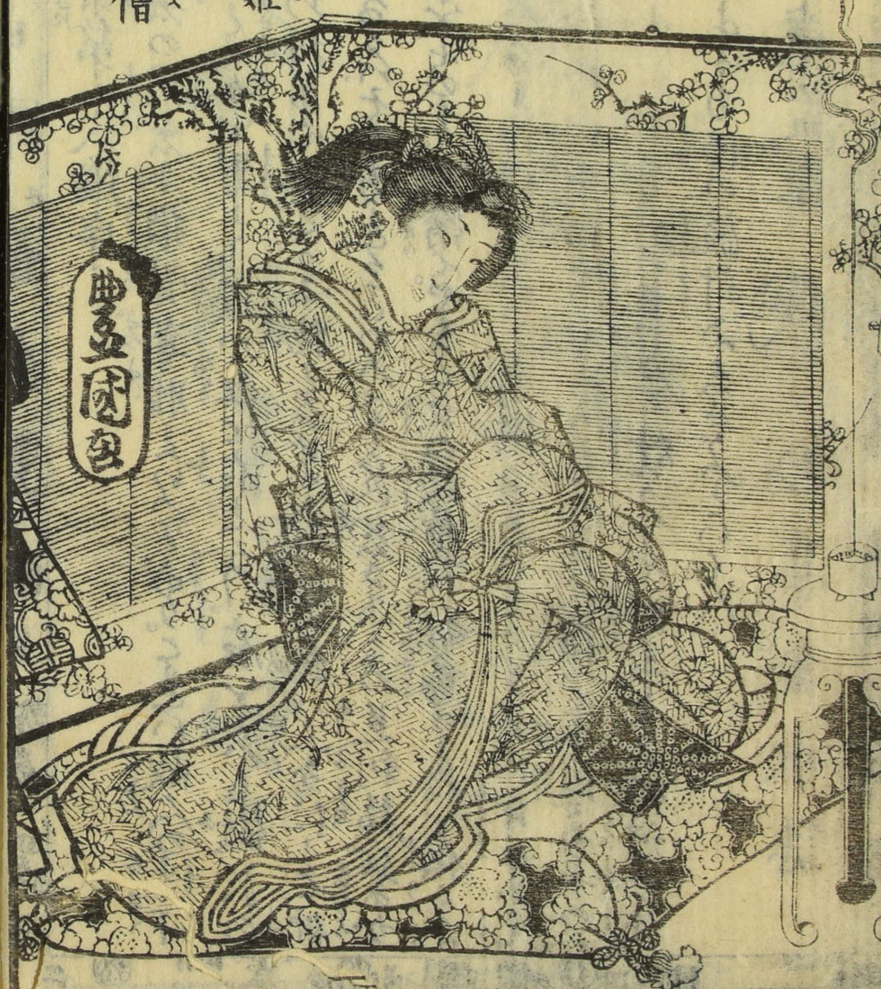
東八

松亭金水誌

五十八翁
方有後
静思堪喜
亦堪嗟
持盃祝願
無他語
慎勿頑愚
似汝爺

三會姫の新女僧

六條御所

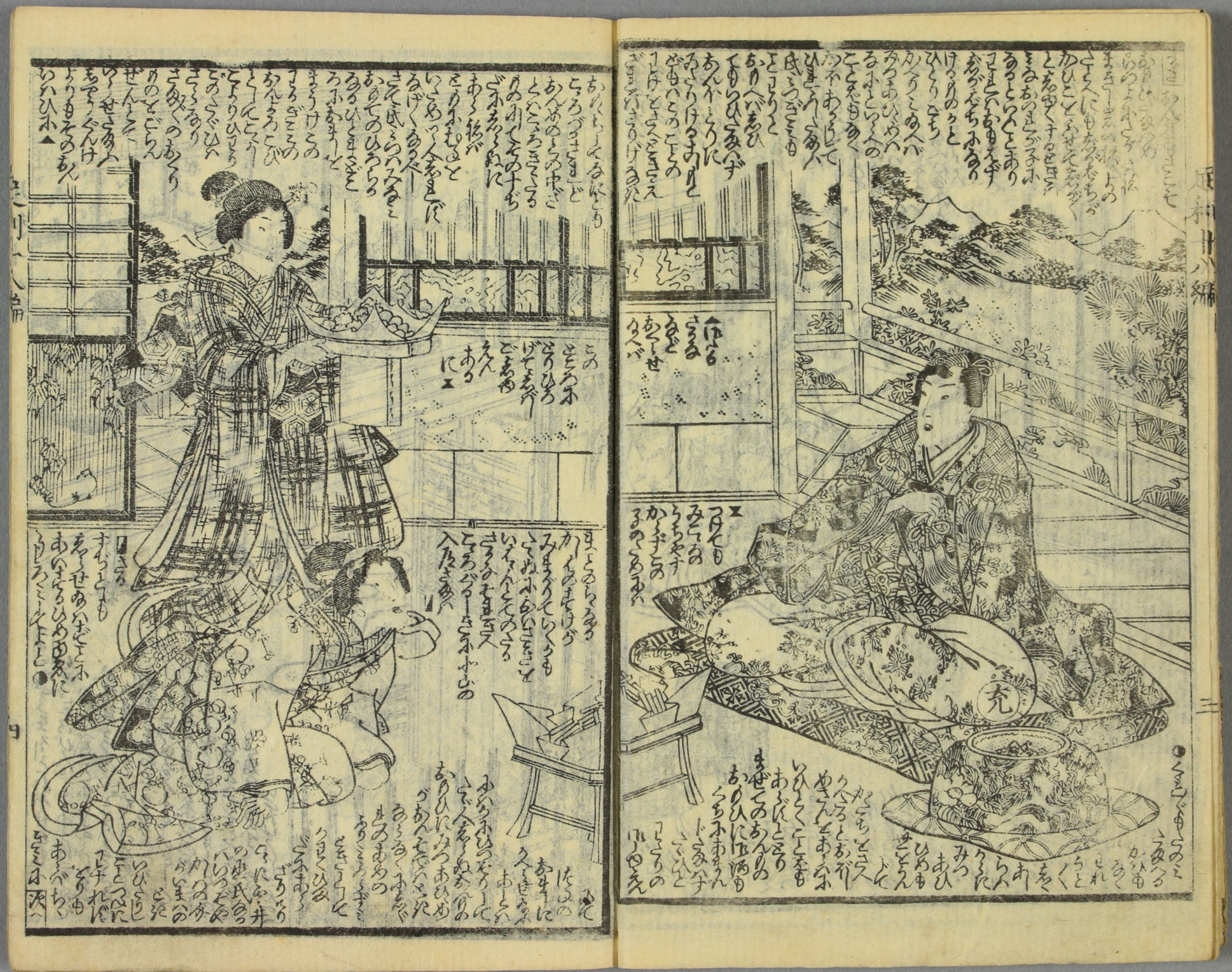


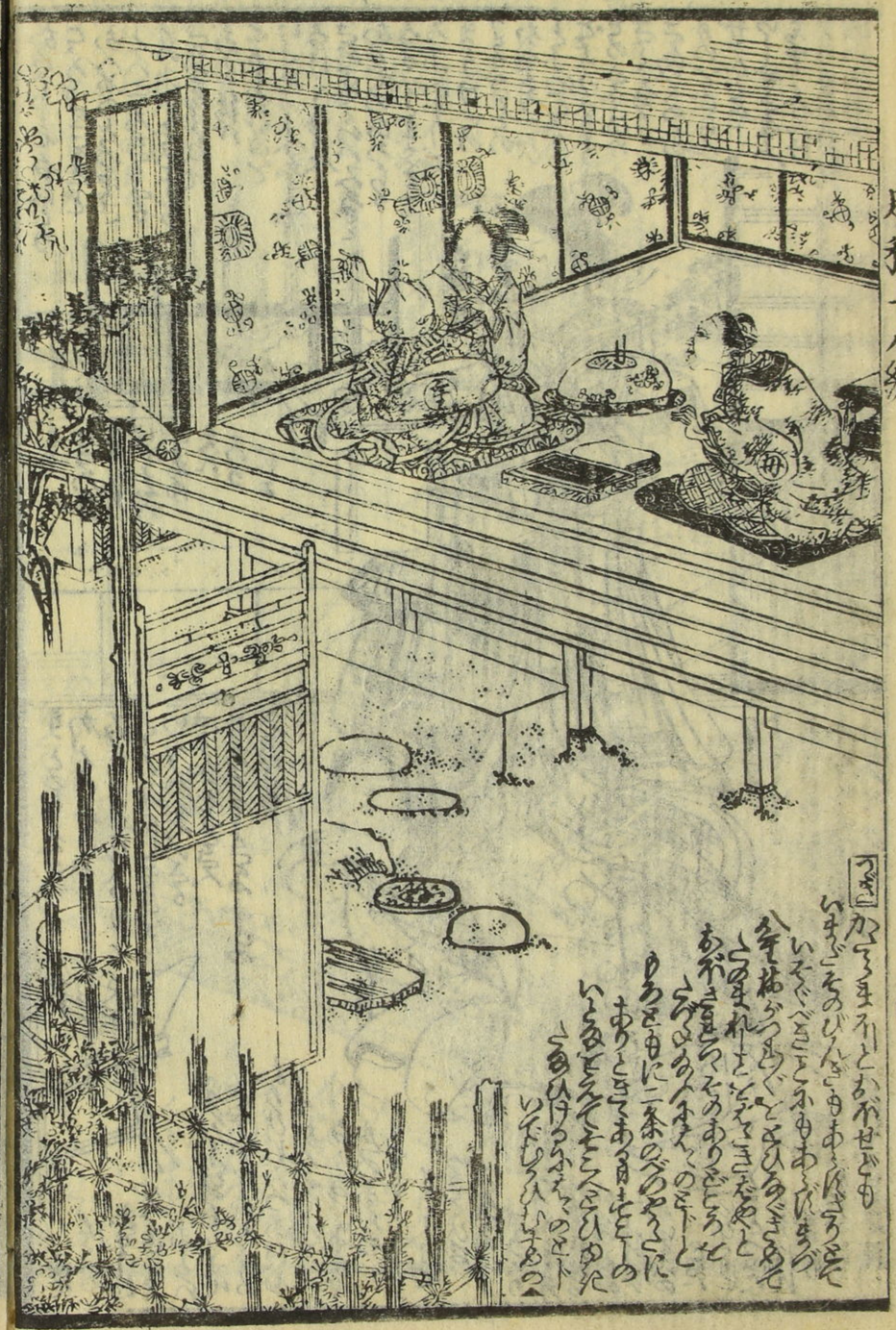
氏充公

白容之助

三會の乳母
中里

十八夜人のときめ
舎
中


足利世八編
二
充



つぎ

かくてまたいとおかせども
いまだそのびんぎもわるいがうとて
いそぐべきことをもわるびまつの
年始ぐつもぐとそひるぐきめて
ちのまれとそをてきたあと
あれきたりたのありどころと
ちひのへまくのごとと
ひろさもに二本のべのやくこに
ありときてある月をとーの
いとなとてそこへさひめた
ちのひけつるをてのごと
いそしひへいちあの人

そうあいさて
のとうあいと
もそはくというくも山所よ
さるのふぞうーとのり
かそのすけどやぐの
つまとと対いとちのぐる
ののあくいろれちて
ちうとのあたちく
とちれうるのぞつふに
うとまれて

人
ちくぬ
あげとれ

月日をあくる
ちちかとのかりぐとひ
つきつくとちうくるる
とうるかのとちくまる
うまびへ次

◐えすのうちさんも
いとうのつうろく
かとるめりうぢ仲い
梅の恋どちらく
まるさとろく仲
このこころ
いちざありこれ
あんぢざあ
かとの秋とい
きるのようろ
ろ
あつく
ろろろ
ともんな
るか
今は
あなどの
ひとりて
ちりひ
いどこぬ
こたも
ろく
ろく
さの
いや
まき
ろに
つき

七

つぎこのごぜんへ
きこりしゞ日ごろ
ろうぢ仲いきこの
方のとこうまべ
ときこてみころ
へごとろくふびんの
りのふこるー
ゆへば梅こ恋も
うちさけてりの
かごらかをうもあり
このわどうぢ仲が
このこゆえ一の文車えまて
つろくせらる金ぎんの
まるきこるろんくの金いと
こるやうにあとこあ

◐くりぢちゆ
ダくぜかまごえぢ
さびきふもあり
ぎすのろこ沈の
おのるふぢるこも
大うろうせんりろ
とびぶ水上ぢの後仕

とらひけん◐

さまべそのうりさ
えもいまべ梅の恋い
うろくびどふわわ
ときもわくざるゆえ
らのめるるくんと
きらーゆひけんもまき
ちんきろくふかの
ふくるまふさあくの
ふこぢあなのーろが梅の恋を
しそそのうちるるえんを
ろうよせゆふれどわ梅の恋
まくまいのでくあるうんどうう
とわめそあんえべーこまを
えいまこううぢ仲わと
ゆこゆひつゆふのえぢこまを
わもろいれとおりんふゆと
きひゆへば梅の恋いうち恋こ
つとぢおうぢ仲こまを
かうこゆひれとおもな
きくすべーるへぢがくろふ
るのふろとーまんりていいとう
あなそるふそ梅の恋いわあう
とぢろううまくこのかぢろうく
あまくてびゆろうきそちんまえを
ちろぢきろかくてるのーか月の
るろへばのとぢ恋いあをを
さておるいわふちげりあの
ときこのこ母とそそくさる◐

いまのこのふ
るのまれ
るるるん
ちまれ
やらず
ちろく
ぢくろあぢ
かこんとひ
ときそ
それるまん
びぢろぬ
るにいろも
いろもこち
あーこそ
いちども
こゆん
せーこるく
母のこぢのこ
こちいぢ
よろこび
きこうるのこ
るまこびりぎく
かとえまひゆきこかひ
ときづぢくありんるろう
こぢーこるこへ

次へ

つぎ



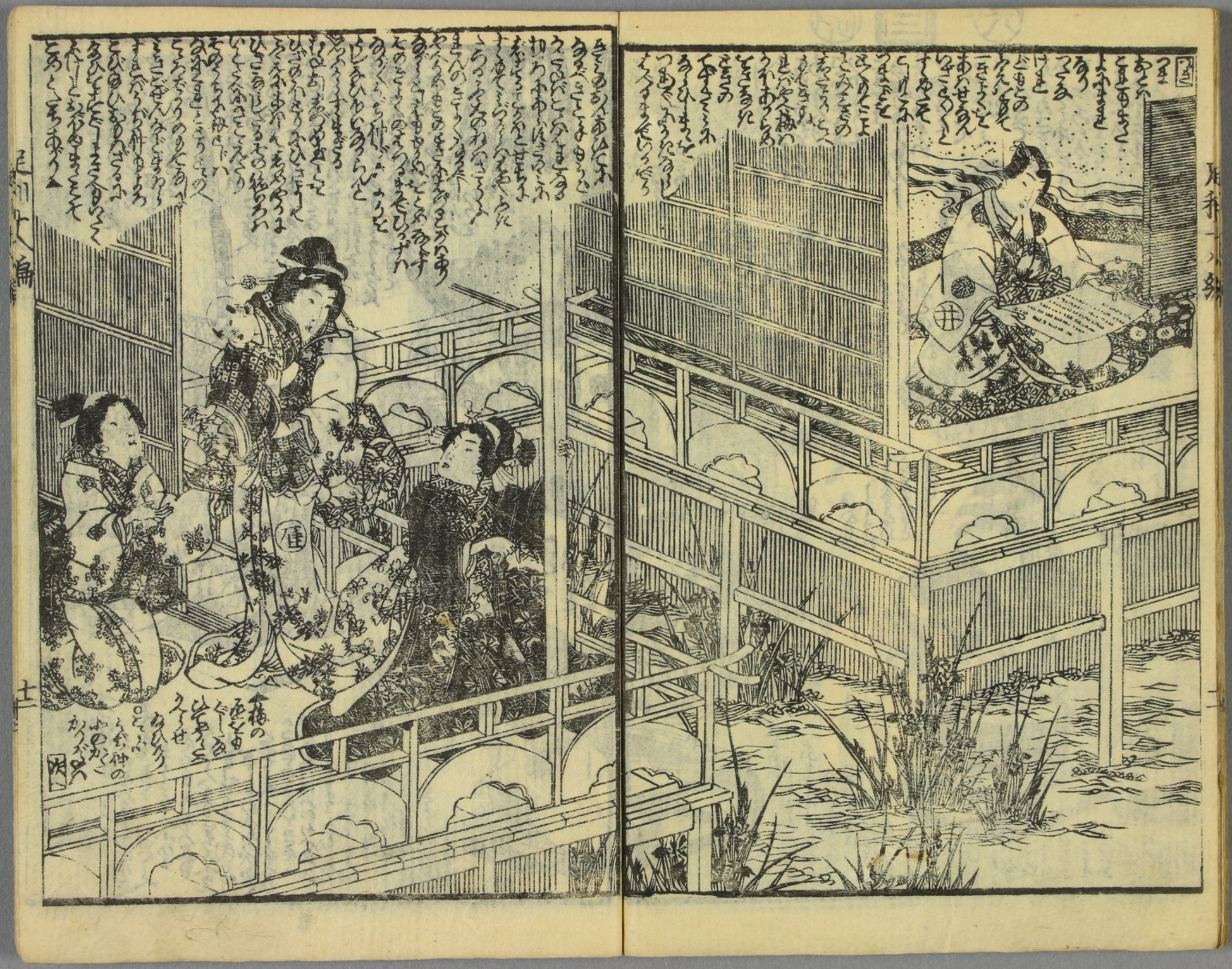

梅
井

重
井
梅
毋

國貞画
金水作
梅
車

猫の年
豆蔵作
一寿斎国貞画
錦耕堂梅行

腰廿人前
廿人前

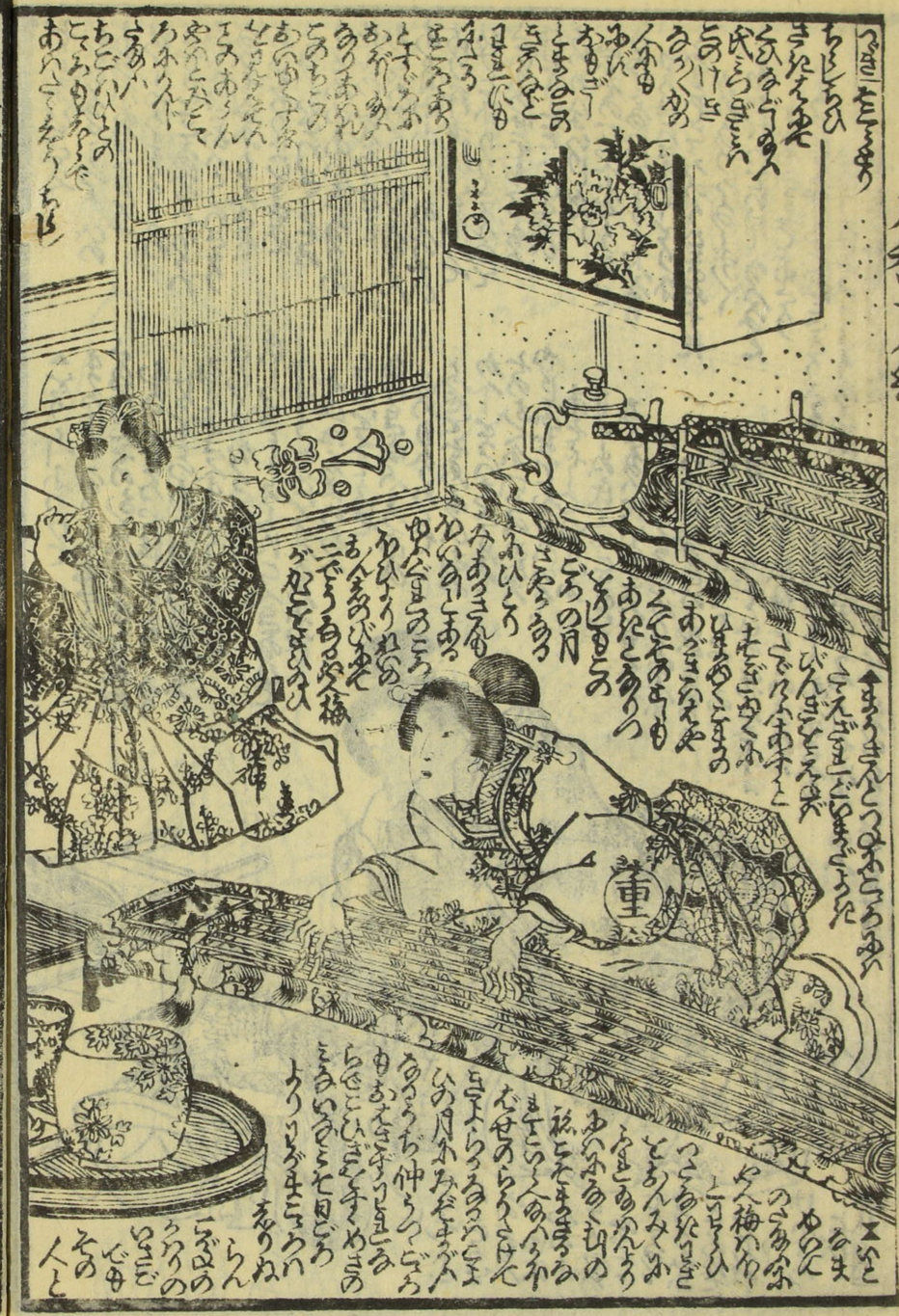


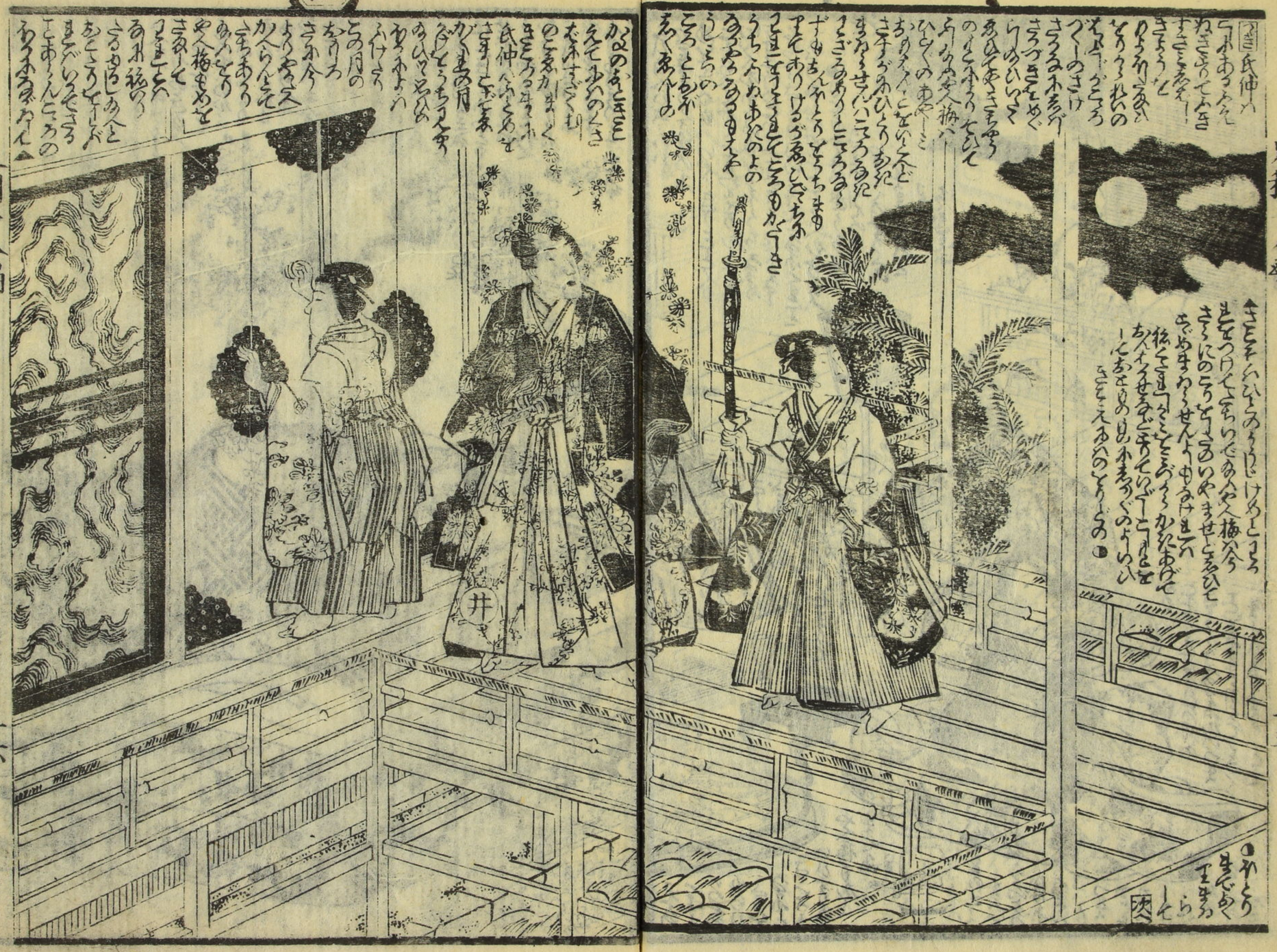
井
高
秋

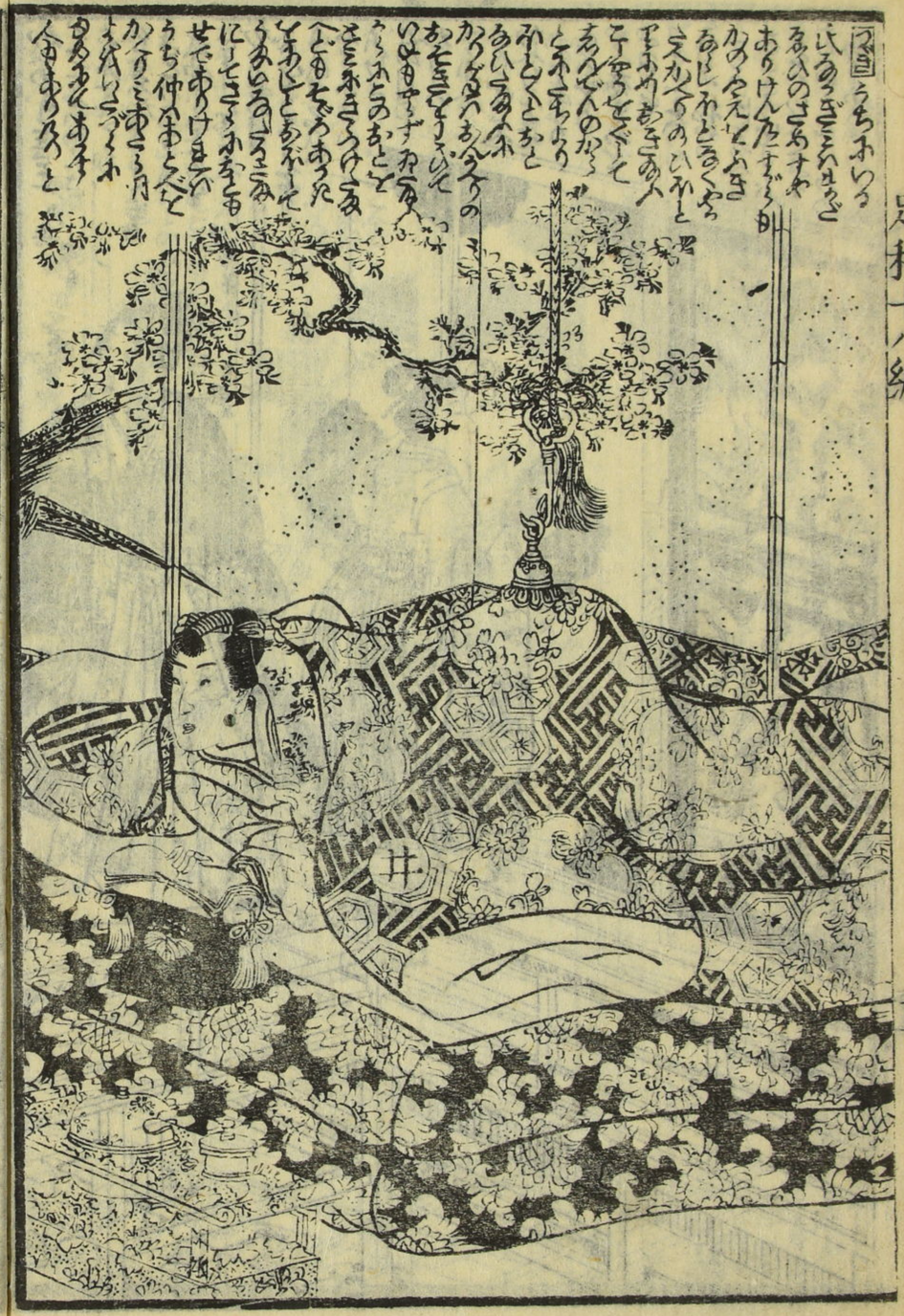
梅
充

充
合日

中
か






井

柏

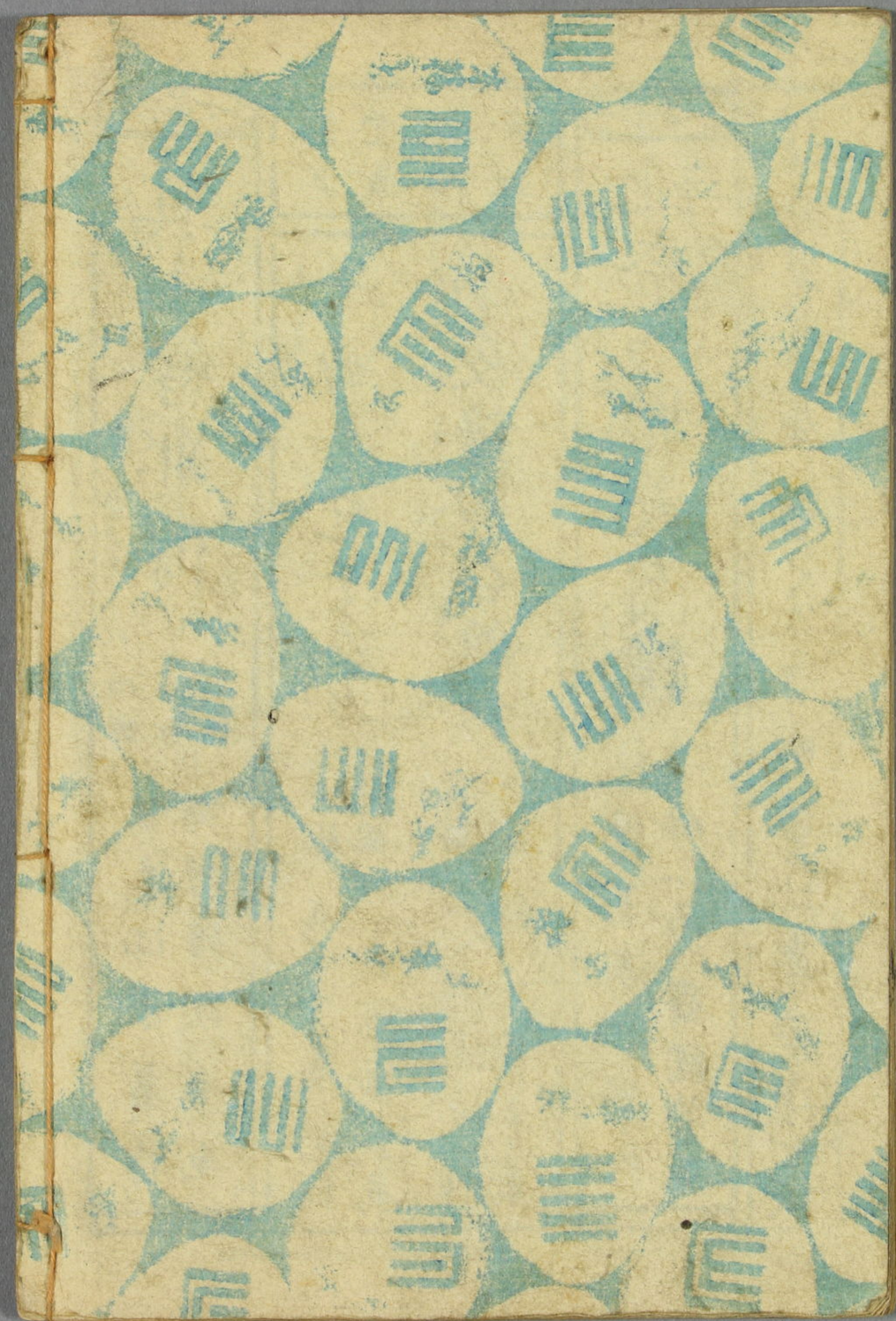
紫

錦耳堂蔵板目録

其由縁鄙俤　十四編　笠亭仙果著作
十五編　十六編　梅蝶樓國貞画

十勇士尼子の残党　三編　為永春水作
四編　壽齋國貞画

雨夜鐘四谷雑談　五編　河竹其水作
六編　歌川國貞画

比奈乃都大内譚　初編　笠亭仙果作
二編　一勇齋國芳画

地本繪草紙問屋　江戸ちりめん町　惠比壽屋庄七板